

平成14年2月20日 第三種郵便物認可 平成27年3月1日発行(毎月1回1日発行) 第15巻第3号通巻165号

毎月18日発売

定価1,530円

Vol. 164

オウンドメディア運用術／地方でクリエイティブに／Unity／emosi

Web Designing

【ウェブデザイニング】サイト構築のためのトータルデザイン誌

ゆったり、のんびりだけじゃない。でも地方暮らしはスバラシイ!

地方でクリエイティブに生きる

オウンドメディア

LIG式「10のノウハウ」と成功事例が導く

運用術

Unityをはじめよう(前編)

Monthly Focus

nanapi発の
非言語なSNS「emosi」
モバイルサービス最前線



DIGITAL MARKETING

—最大限に伝えるためのものづくり—

2015

2015 /

3

FEATURE 2 : WEB CREATORS IN LOCAL LIFE

丹波には何かがあるのではないかな？

兵庫県丹波市にある(株)ご近所は、丹波市民の出資によって2012年に設立された。事業内容は丹波地域の魅力を情報発信することで、主に都市部で配布される地域情報誌「tocco. (トッコ)」の制作や地域ブランドのプロモーション、マーケティングなどを行っている。スタッフは7名で、いずれもおもに関西圏都市部からの移住者。今回話を聞いたWebプログラマーの林田牧子さんも、そうした移住者スタッフの一人だ。

京都出身で大阪の大手IT企業に勤務していた林田さん。当時は田舎暮らしに具体的なイメージは持っていなかったが、旅をテーマとしたイベントを通じて丹波市での移住者受け入れの取り組みを知ったという。

「丹波市に移住して長期旅行経験者を受け入れる活動をされていた方の講演を聞いたのがきっかけです。イベント後に2時間ほど待ってその方と数時間直接お話しをして、丹波に行けば何かがあるのではないかなという感覚で移住を考えるようになりました」

その後、週末を利用して2013年11月頃より体験移住を続け、2014年の6月に丹波市内へと移住した。現在は同じく1ターン移住の同僚とシェアハウスで暮らしている。

「京都には山も川といった自然もありますが街は人工的に整備された空間で、もっと自然のある里山でどう遊べるのかを自分自身が知りたいと思いました。また、将来子育てする際に日常生活の拠点をどこに置くのかを考えたとき、田舎暮らしに憧れを抱きました」

一番は人の魅力

移住場所を丹波に決めたのは前述のイベントが

きっかけだったが、実際に週末移住で訪れたことで「心をわしづかみにされる」感覚を覚えたという。林田さんをそこまで惹き付けた丹波の魅力とは何なのだろうか。

「丹波の魅力は自然が美しいというものもあるのですが、一番は“人”です。地元の人はもちろん、Uターン者も1ターン者も努力を惜しまず、情熱や夢を実現できる人がたくさんいました。それまで仕事を生活費を得るためだけにしてきた私にはそれが新鮮で、見えている世界が大きく変わりました」

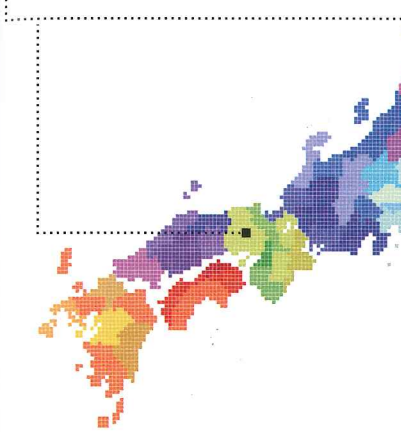
移住してから毎日が刺激的だという林田さんが一番驚かされるのは、Uターン後に(株)ご近所を設立した代表取締役の小橋昭彦さんだという。小橋さんはインターネット広告制作に早くから取り組み、地域情報化にWebマーケティングの手法を導入した第一人者としても知られている。「移住者が働ける場所としての会社を用意して、オフィスを構えた上に給与が出せる体制を作り、丹

兵庫県／丹波市

人口: 6万7,540人(2014年12月)

面積: 493.3km²

兵庫県東部にある標高100m前後の盆地。農林業中心だが、パルプや携帯電話、菓子などの工業も盛ん。丹波栗、丹波の黒豆、大納言小豆などが有名。



(株)ご近所
<http://gokinjo.sc/>

「地方創生」をリードする企業の情報発信という側面を強調するため、社員の一人ひとりがなにを考えてなにをしているのかわかるようにブログ形式にした



tocco.
<http://tocco.tamba.sc/>
地域活性化をベースに丹波の暮らしぶりを大都市(大阪、神戸、東京など)に発信していくというコンセプトの情報誌(左)で、Webサイトとも連動している。都市部でセンスのよい暮らしを志向しているインテリアショップにも置かれることで、情報発信と同時に「土の付いた大根を手にするような地方の日常が、実は都会から見れば素敵であることを地域の人もわかってもらいたい」という



HopeFarm
<http://hopefarm.jp/>
(株)ご近所のもう一つの事業の柱が地域の魅力自体を作っていくことだ。具体的には地域ブランドを作ってプロモーションやマーケティングを手伝っていく仕事になる。都会と都市をつなぐ農場「HopeFarm」のWebサイトもご近所の制作によるもの



オフィスではテーブルや椅子も地元の木材を利用。デザインは同社スタッフも関わっている。「Webがあったとしても、よいものがまだまだ知られていないというのは地方に共通した課題なのだと思います」



都会で働いていたときは基本的に3食コンビニという食生活だったという林田さん。同社オフィスで、地元の野菜などを使って料理することを「パワーランチ」と呼んで社員一同楽しんでいる。その結果が、林田さんは風邪をひくこともなくなったという

波の人たちとのつながりを作って事業化してくれたことに衝撃を覚えました」

そして何より、これまでのITスキルを活かして丹波で働いているという事実こそが、林田さんが数年前まではまったく想像できなかった驚きだという。現在は雑誌「tocco.」と連携するWebサイトの制作、商工会議所の起業支援プロジェクト、農林業ボランティア支援団体の情報発信活動に関するWeb制作などを行っている。大会社の業務システム開発と異なり、ほかの仕事の進み具合を見て手伝ったりするのは小さな会社ならではの、いろいろと気付かされる部分も多いという。「裁量権が大きいのは一長一短あって単純には比較できないのですが、私の求めていた働き方や生活スタイルが丹波にあったということです」

田舎は楽しいことで忙しい

(株)ご近所は週4日勤務のため、前職より収入は減っているという。物価や家賃相場なども特別安いというわけでもないが、同僚や地域の人に支えられることも多く、生活面で暮らしにくさは感じないという。もちろん、移動に自動車が欠かせない、コンビニのATMがないといった利便性の差はあるが、 unnecessary消費行動が減ることで生活の豊かさは増したと実感している。「日役(ひやく)」といって、草むしりやゴミ捨て場の清掃など、地域の協働作業があるのは地方ならではの強み。強制ではないのですが、地域の人との交流を望むなら参加するほうが良いと思います。都会の効率的なビジネスコミュニケーションと違って

て信頼ベースで話が進むので、ときどきでも“顔を見せる”のが意外と大事かもしれません」

また、丹波の人たちのスピード感の速さや前のめりな姿勢にも驚かされるという。「のんびりというイメージで地方を捉えるのは間違いです。田舎のほうがイベントや楽しく刺激のことがたくさんあります」と小橋さんも指摘する。

時折大雪や大雨などもあるが、常に自然と闘ってきた経験を持つ丹波の人たちは、それすらも楽しんでしまう強さを持っているという。「都市にいたときは“迷ったらしない”という環境でしたが、ここでは“迷ったらする”を心がけています。転んでしまうこともあります。そこから立ち上がるというのが大事で、私も日々転びますがそれを見守り支えてくれる人が丹波にはいます」

週末移住体験を通して、本当に必要な生活を描く

地元の人たちと積極的に交流、丹波の魅力を都市に発信



はやしだ まきこ
林田牧子

京都府京都市出身。IT企業に勤務し、その後丹波へ移住を決意。(株)ご近所に就職しWebプログラマー、ニューツーリズムコーディネーターとして地域の情報発信に取り組む。

京都から移住し、兵庫県丹波市の(株)ご近所で働くWebプログラマー林田牧子さんは、丹波の人たちと交流するうち、地域に生きる喜びや強さを感じたという。そして、丹波の魅力を都市の人たちに知ってもらおう活動を、会社をあげて行っている。

